関西大学『独逸文学』第48号 2004年3月

カフカの恋人たち

酒 井 友 里

フランツ・カフカ（Franz Kafka, 1883－1924）は、41年という長くはない生涯の間に数多くの恋をした。その相手として有名な人物といえば、まず挙げられるのは、フェリーツェ・バウアー（Felice Bauer, 1887－1960）とミレナ・イェセンスカ（Milena Jesenská, 1896－1944）であろう。フェリーツェは、カフカが結婚を意識した初めての人であり、実際に二度の婚約が交わされ、そして二度とも解消された[1]ことは、あまりにも有名である。また、フェリーツェと交際していた間は、カフカにとっては比較的多産であった時期で、いくつかの短編や断章が生まれたし、それらのなかにはフェリーツェをモデルとした人物が登場するものがあることや[2]、5年の交際期間に、フェリーツェ宛に書かれた500通以上という膨大な数の手紙の存在から、カフカを語るうえで欠かすことの出来ない人物である。もう一人の女性ミレナは、フェリーツェと比べると、交際期間は1年余りと短いものの、その存在の大きさは計り知れないものである。カフカの恋は、「手紙においての恋」と表され、残されたミレナ宛の手紙は、さながらひとつの恋愛小説のようだ、とも言われている。ミレナは、カフカの恋人としてのみならず、ジャーナリストとして、また、カフカの小説のチェコ語への最初の翻訳者としても知られており、その波乱に満ちた生涯については、伝記も書かれたほどである[3]。そしてもう一人、忘れてはならないのが、最晩年のカフカとともに生き、そしてカフカを看取った人物として知られているドーラ・ディマント（Dora

1 一度目は1914年6月婚約、7月に解消、二度目は1917年7月に婚約、12月に解消。

2 „Das Urteil“（邦題：『判決』）に登場するFrieda Brandenfeld。

3 Margarete Buber-Neumann: Milena, Kafkas Freundin: Langen Müller, 1986.
訳書には、田中昌子訳：「カフカの恋人 ミレナ」、平凡社、1993年。

Dymantまたはディアマント Diamantとも表記、1902－1952）である。カフカとドーラが一緒にすごしたのは、カフカが死ぬまでのわずか2年間で、最初はベルリンで貧しいながらも幸せな生活をし、そしてカフカの病状が悪化した後は、ウィーン近郊の二つのサナトリウムで、ドーラはカフカを献身的に看病した。晩年のカフカに、安らぎとささやかな希望を与え、また、彼の執筆活動を支えた。病状が悪化するまでの間に、カフカは、今の世に残されている数編の短編以外にも作品を書いたということであるが、それらのいくつかを、ドーラはカフカに乞われて焼却した。また、カフカの死後にドーラが隠し持っていたとされる草稿も、失われてしまった。

そして、もう一人重要な人物がいる。カフカの二人目の、そして三度目の婚約者となったユーリエ・ヴォリツェク（Julie Wohryzek, 1891－1939?）である。ユーリエに関して語られることは少ない。残されている資料が、きわめて乏しいからである。カフカがユーリエに宛てて書いた手紙は一通も残されていないし、カフカとユーリエが交際していた1919年から1920年にかけては、日記もわずかな断片にすぎない。また、カフカの友人であるマックス・ブロート（Max Brod, 1884－1968）が書いたカフカの伝記[4]には、ユーリエについて書くことに何らかの支障があったか、もしくはブロート個人がユーリエに対しては快く思っていなかったのか、ユーリエに関しては、ミレナとの関わりのなかでわずかにイニシャルによって彼女の名前が出てくるのみである[5]。しかも、ユーリエは、フェリーツェとミレナという、カフカについて論じるのに無視することのできない、もっとも重要な人物の一人に数えられる二人の間で、どうしてもその存在は地味になりがちである。カフカの作品においては、ユーリエは、『父への手紙』（„Brief an den Vater“）を語るうえで欠かせない存在であるが、しかし、これのみである。そこで、あまり注目されることのない人ユーリエについて、ごくわずかであるが、残された資料からその人物像を描き出してみたいと思う。

4　マックス・ブロート、辻瑆ほか訳：『フランツ・カフカ』、みすず書房、1972年。
5　ブロート　1972年、248ページ。

ユーリエの生い立ちについて、詳しいことはわかっていない。彼女の父親はユダヤ人で、靴屋兼ユダヤ教会の教会守をしており、彼女自身は、プラハ市内で小さな店を開いていたらしい。いわゆる、下層の出の人である。

ユーリエがどのような人であったのか。ユーリエの人物像については、カフカがブロートに宛てて書いた手紙において詳しく語っているので、少し長くなるが、引用する。

> ごくふつうでいて、しかも驚くべき人物だ。ユダヤ女でなく、ユダヤ女でないこともなく、とりわけユダヤ女でないこともなく、ドイツ女でなく、ドイツ女でないこともなく、映画とオペレッタと喜劇、それにプードルとヴェールにうつつを抜かしていて、厚顔無恥なイディッシュを、無尽蔵に、無制限に、おびただしく知っている。全体としてはたいそう無知で、憂い型というよりは陽気型で――ざっとそんな女性だ。彼女の属する種族を正確に言おうとすれば、女店員の種族だと言わざるをえない。しかも彼女は恐れを知らず、正直で献身的だ、――こんな立派な特性が、ひとりの人間のなかでひとつになっている。肉体的には確かに美しくないわけではないが、たとえば僕のランプの明かりに向かって飛んでくる蚊のように、取るに足りない。この点でも、ほかの点でも、君がおそらく不快な思い出を持っていると思うBl嬢に似ている。(1919年2月6日、シュレーゼン)[6]

カフカは、ユーリエの無邪気さと献身的な性格、そして女性らしいものの考え方を、とりわけ気にいっていたと思われる。また、ユーリエが素直で控えめな性格であった点も、カフカにとっては好ましいことであったようだ。彼の態度や癖などを、ユーリエが、戸惑いながらも受け入れるようになってくれたことに喜びを感じていたのであろう。カフカは、前述した手紙の続きに、「彼女には理解できないだろうし、興味を示さな

6 Franz Kafka: Briefe 1902－1924 : S. Fischer Verlag, 1966, S. 251f.

いだろう」[7]と断りながらも、ブロートにシオニズムに関する何らかの本を貸してくれるよう依頼している。自分が興味をもっていることを、ユーリエにも知ってもらいたいと思ってのことであろう。ユーリエは、カフカの期待に応え、「女の子らしい、一時的な理解という独特な方法」でありながらも、よく理解したという（1919年3月2日、ブロート宛ての手紙）[8]。しかも、カフカが後で知ったところでは、ユーリエは、シオニズムに無関係ではなく、彼女の戦死した元婚約者はシオニストであったし、彼女の姉妹はユダヤ教に関心があり、一番の親友はユダヤ教に没頭し、欠かさずブロートの講演会に通っていたらしい。ユーリエの意外な一面を知ったカフカは、さらに彼女に夢中になる。

では、カフカとユーリエ、二人の出会いから別れまでは、どのような経過をたどったのであろうか。ことの成り行きは、1919年11月に書かれた「ユーリエの姉妹宛ての手紙」（以下、「手紙」とする）[9]におおよそのことが書かれているので、伝記的事実もふまえながら、その輪郭をなぞってみよう。

1919年、カフカは、結核が再発し、長期療養が必要になったため、2月から3月にかけて、プラハ北方にあるエルベ河畔の保養地シュレーゼンへ行った。そこには、多くの結核患者が療養に来ていたのであるが、ユーリエもまた大病を患った後の療養に来ていたものらしい。二人は、「たいへんに奇妙な」（BJ）知り合いかたをした。「私たちは数日の間、会えば笑ってばかりいました。食事のときも、散歩のときも、向かい合って座っているときも。その笑いは全体として、快いものではありませんでした。はっきりした動機もなく、ひどく苦しい、恥ずかしい笑いでした。」（BJ）それゆえ、二人は次第に離れていった。しかし、カフカは「何ものかの脅威」（BJ）を感じ、1年ぶりに眠れぬ夜をすごしたという。同じように、ユーリエも会うのを控えていた。しかしながら、そのようなことは、長くは続かなかった。「私たちはそれぞれがお互いにとって、

7 Vgl. Kafka 1966, S. 251f.

8 Vgl. Kafka 1966, S. 253.

9 Vgl. Kafka 1966, S. 255f.
http://homepage.uibk.ac.at/homepage/c108/c10815/(29.12.2003) [Abk.BJ].

強制力であり、しかも幸福と苦悩とにはかかわりなく、単に、幸福としての、そして苦悩としての必然性なのです。」(BJ) そのうえ、厳しい冬が二人を「文字通り魔法をかけられたような家」(BJ) に閉じ込めてしまった。そして、そこで否応なしに愛は高まっていった。だが、二人は、お互いに相手への気持ちを断ち切る決心をする。カフカは、結婚して家庭を持つことを重要だと考えているが、自分にはそれが不可能であるということ、だから二人は別れなければならないということを、ユーリエに納得させ、そして、まだ„du“で呼び合ってもいなかった恋人同士は別れた。ただし、この別れはわずか3週間だけであった。先にユーリエが、そしてその後カフカがプラハに戻ったとき、二人は「駆り立てられるように、お互いのもとに飛んでゆきました。」(BJ) それから二人は離れ離れでいることを放棄し、森の中で、夜の街の通りで、一緒にいることに幸せを感じていた。少なくともユーリエは、この現状に満足していたようである。しかし、完璧主義であったカフカは、どうしても満足できずに、ユーリエに結婚を迫った。なぜなら、カフカにとって結婚は、愛するもの同士がなしうる最高の形であったからである。カフカの述べるところによると、シュレーゼンでの説得の際、ユーリエは、自分は結婚しないだろう、と言ったという。「私のように、結婚するつもりはない、とか、できない、とかは言いませんでした。」(BJ) 結婚しないという点に関して一致してはいたが、カフカは、徹底的に真剣になるか、別れるか、の二つの可能性を考えることしかできなかった。そして、カフカは後者の別れを選んだ。前者は、カフカにとっては結婚を意味していたからである。ユーリエは、このことをなかなか納得できなかったであろう。しかし、素直な彼女はカフカの言うことに従った。このように、結婚の不可能性から別れを迫った男が、再び交際が始まって気持ちが高まってくると、今度は、結婚を迫ってきたのである。ユーリエは、面食らったに違いない。カフカお得意の懸命の説得もあったのであろう。「事態はこの場合、いずれも以前［フェリーツェとの婚約のこと］よりもずっと恵まれていたのです。」(BJ) と、カフカが手紙のなかで書いているように、カフカは、ユーリエが考えている以上に二人は近しい関係だと考えていたし、また、結婚に関わるすべての準備は非常にはやく、簡単に済んでしまうだろうと予測していた。実際、快適な住まいが見つかり、秋には

入居できることになった。また、カフカは、明らかに予想される彼の父親の反対が、逆に結婚の正当性を証明するとまで考えていたのである。いくら素直であどけないユーリエであろうとも、悩みに悩んだであろうと思われるが、彼女は結婚に同意したことはいうまでもない。後で味わうことになる苦しみなど、まったく想像できないほどに、このときまではうまくいっていた。

しかし、事態は、二人が婚約にいたったときと同じくらい急激に展開した。結婚まで順調に進んでいくと思われたのに、突如その雲行きがあやしくなったのである。その原因としてまず考えられるのは、カフカの父親の反対である。手紙のなかで、カフカは、このことはたいした障害ではないといって否定しているが、実際は、カフカが考えていた以上に大きな影響を及ぼしていたのだ。当然ながら、カフカが考えていたような結婚に対して有利な働きをするものでもなかった。『父への手紙』は、ユーリエとの「結婚の試み」が最大の契機となって書かれたものであることが知られているが、そのなかで、カフカは、父が彼の結婚へといたるまでのカフカの態度を真っ向から否定したうえ、間接的にではあるが、婚約者であるユーリエに対して浴びせた罵詈雑言は、カフカを奈落の底へと突き落としたのである。父の言葉を聞いたカフカは、「目の前がかすんでしまった」(H155)[10]というほどに衝撃をうけた。「あなたがあれほど深く言葉でもって私をおとしめられた事はおそらくなかったでしょうし、あれほどはっきりと私に対して軽蔑をお示しになったこともありませんでした」(H156) と、カフカは書いている。カフカ自身も認めるところでは、彼の「内部の反対勢力」(BJ) が、結婚の邪魔をしたということである。この内面問題については、『父への手紙』においても、カフカは詳しく触れている。この「反対勢力」が、とてつもない力でもってカフカの決心をゆるがせようとするのだ、とカフカは述べている。このほかには、実際的な問題も、もちろんあった。住居の問題がそれである。先に述べたように、入居できることになっていた住まいが、突然手に入らなくなったことである。当時は、第一次世界大戦後の混乱の真只中で、

10 Franz Kafka: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlass: Fischer Taschenbuch Verlag, 1983. [Abk.H]

深刻なアパート不足になっていたため、代わりの住居を見つけ出すことはきわめて困難であった。一見たいしたことのない問題のように思われることであるが、しかしながら、カフカにとってはどんなにささいなことでも、大きな障害になりうるのである。「あのときの、これが曲がり角でした。その後は、もう止められるものではありませんでした」(BJ) と述べ、カフカはすべてをあきらめてしまった。そして、そんなカフカに、ユーリエはなすすべもなく従うほかはなかったのである。

結婚はしなかったものの、二人の関係はまだしばらく続いていた。手紙の最後でも、カフカは二人の関係がこれからも続くこと、さらには、機会があれば一緒になりたいということを希望している。しかし、ついに別れのときはやってくる。1920年4月、イタリアのメランに滞在したカフカは、そこからミレナに手紙を書いた。そして、そこから二人の熱い交際が始まったのである。ユーリエとの関係が続いていたにもかかわらず、カフカの心はどんどんミレナに向かっていった。ついには、同年夏、ミレナの強い要求に応じて、カフカはユーリエとの婚約を完全に解消した[11]。おそらくこの日のことを書いたと思われるブロート宛の手紙(1920年6月、メラン) には、「さしあたっては、ぼくがなしうるもっともひどいことをしてきた。それもおそらく最もひどいやり方で」[12]とある。これ以後、カフカはミレナとの手紙の恋愛にのめり込んでしまう。一方、カフカと別れたあと、ユーリエがどうなったかについては、ほとんど何もわかっていない。1930年代に、プラハ市外の精神病院に送られて以後の消息は不明である。

以上、とりあげられる機会の少ないユーリエを中心に、4人の女性について述べてきたが、これまで脇役でしかなかった人物の位置づけを変えることによって、カフカの作品を別の観点からみることが出来るのではないだろうか。

11　ブロート　1972年、248ページ。

12　Vgl. Kafka 1966, S. 276.

酒　井　友　里

付記

本文中の引用の訳は、
江野専次郎、近藤圭一訳：『カフカ全集Ⅳ　新潮社版』、新潮社、1959年。
吉田仙太郎訳：『決定版カフカ全集９』、新潮社、1981年。
を参考に筆者が訳したものである。よって、その文責は筆者が負うものである。

参考文献（脚注で挙げた以外のもの）

エルンスト・パーヴェル、伊藤勉訳『フランツ・カフカの生涯』、世界書院、1998年。
ネイハム・N・グレイツァー、池内紀訳『カフカの恋人たち』、朝日新聞社、1998年。
Franz Kafka: Brief an den Vater: Vitalis, Furth im Wald, 2001.
Carsten Schlingmann: Literaturwissen für Schule und Studium Franz Kafka: Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1995.